

大阪市立大学山岳会ニュース

OCUAC NEWS NO. 36 2003. 5. 25

Contents

- ・立山新人合宿 & 新人紹介 p. 1～

佐々木惣四郎、兵頭 渉

- ・ランタン・リルン p. 6～

43年目の墓参 広谷光一朗

ランタンリルン憧憬 川勝 弘一

ランタンへの旅の思い出 大島 富子

ランタンリルンの巡礼の旅 橋本 信行

- ・2002 秋 みちのく2人旅 p. 14～

大島 一恭

- ・キリマンジャロ登頂 p. 18～

長谷川 ふみ子



立山新人合宿 三田平にて 写真 兵頭 渉氏

平成15年度5月新人合宿報告

2003/5/1-5/5

佐々木惣四郎

本年久しぶりの新人2名が入り、剣・立山にて合宿を行った。新人2名に対し8名のOB構成であったが、天気に恵まれて5日間の合宿を無事終える事ができました。新人は運動不足であったにもかかわらず良く頑張ってくれました。またOBの頑張りも目立ち久しぶりに活気に満ちた登山をする事ができました。

5月1日	室堂ー雷鳥沢テント場	
2日	雷鳥沢ー剣沢三田平へ移動。雪渓訓練。	
3日	1パーティ 剣登頂。前剣ー登頂ー平蔵谷ーテント場	8時間
	1パーティ 奥大日往復	10時間
4日	雄山往復 全員10名	8時間
5日	撤収	

三十数年ぶりの新人5月合宿!

s48卒 兵頭 渉

夜行列車で新人に何をどの順番で教えたものか考えたが中々整理がつかないままどろみ黒部駅付近で目が覚めた。電車、ケーブル、バスと乗り継ぎ、穂高・岳沢での自分の新人合宿を思い出しながら室堂の雪原に立った。快晴の空の下、昨夜の雪でうっすらと雪化粧した立山連山、大日岳、剣本峰を眺めながら考えた。

教える事が出来るのは

- ・山行計画、装備・食料準備
- ・生活技術(テント設営、テント生活、水の確保、炊事)
- ・歩行・登攀技術(無雪、積雪、平地、斜面、岩、沢)

自ら考え、学んでもらう事は

- ・山登りの姿勢、
- ・自身のトレーニング
- ・気象
- ・読図

今回は雪上歩行と生活技術を習得して貰う事を目的として私のできる限りの手伝いをする事とした。

入山二日目にキックステップ、ノーアイゼン及びアイゼン装着での登下行、滑落停止姿勢、セルフビレイの練習を別山枝尾根の斜面で行なった。初めての経験で怖い思いもしながら、OB連中のさまざまなアドバイスに一つ一つ答えようとする新人の姿がそこにあった。

三日目は剣本峰隊(木野、兵頭、佐々木、藤村、山田)と大日岳隊(小椋、大島、小笹)本日下山される久保田先輩、それぞれがアイゼンを軋ませながら三田平のTSを早朝出発した。

剣本峰隊は別山尾根ルートを忠実に辿り、前剣の雪壁上部は木野、兵頭がザイルを使用して突破し平蔵のコルを経て、ジュラルミン梯子を登り、カニの横ばいでクサリを掴み午

前十時に本峰に立った。360度の眺望を楽しみ遥か足元に見える三田平のTSを目指して下山を開始した。

平蔵のコルから登路と分かれて平蔵谷を下る。源次郎尾根からの土石を多く含む雪崩痕を見つつ、全方向からの陽光に照り焼かれながらノンストップで出会いへ向かった。出会い間近で雪溪の下を流れる清らかな水の音に惹かれ一口と考えてクレバスを覗き込んだが流れは奥深く口にできなかった。

出会いからTSまでは暑くウンザリする雪溪を山スキーを楽しむ人たちの歓声を聞きながら最後尾で登った。20m先の木野君に追いつこうと努力するも暑さと渴きと日頃の不節

制が祟りついに抜けないままTSへたどり着いた。

四日目は昨日入山した八木、佐々木（近山会）両氏を加え全員で雄山往復(三田平、別山乗越、別山、富士の折立、大汝山、雄山)をした。入山以来続いたさしもの好天もこれでおしまいと思わせる薄雲が高天に広がり初める中、アイゼン訓練を兼ねてTSから別山乗越までジグザグ登行。稜線に出ると視界は良好で雄大なアルプスの峰々を眺めながらの尾根歩きは昔日の思い出をかき立てるものでした。

五日目は下山日。連日の好天に感謝しながら先を急ぐ大阪組とみくりが池温泉で別れ日本で最高地に位置すると標榜する硫黄分の多い温泉に一人浸った。

新人合宿としての成果のほどはこれからの事として、楽しい合宿を皆様と一緒に出来てとても良かった。

小椋君、木野君へ

山登りの楽しさ、厳しさ、苦しさ、怖さなど感じ取ったと思います。

それぞれの課題を確認して次の山行に取り組んでくれる事を切望します。

以上

楽しくこわかった立山合宿

新人 小椋 剛



5日間とも素晴らしい天気で、そのお陰で山にたいして不快な思いがまったくなく、益々山にゆきたくになりました。テントの中は暖かいし、ご飯もおいしく、どんどん腹へるし、トイレも成功、景色もいいし、その中には今後登りたいなおもわせる山も一杯で雪の山もいいなと思わされました。

でもやっぱり少し物足りないなと思ったのは植物・動物など生物のことです。勿論、雷鳥やワシ、ハイマツ、イワヒバリなど少々の生物はいるのですが、今まで雪山なぞ行った事がないからなんですが、山登りという釣りと焚き火、川での水遊びなどがつきものだったので、ただ山へ登って寝るという繰り返しは少し物足りなかった。だから今度はスキーやスノーボードなど出来るようになって、山での2次的な遊びをしたいと思った。

あと時間が余ったら日本海で少々釣りなんかやりたいたいなと思っていました。植物が好

きだなんぞと書きましたが、それは高い所から下が見えないよう視界をさえぎってくれるからなんです。とにかく今回の山行でハッキリしたのは、高山は、はるか下まで見えつばなしで高所恐怖症の僕には、たまらないくらい恐ろしいという事です。なれるのはどうしても不可能なようなので、なんとか技術や体力で少しでもやわらげないと今後の見通しが暗いです。

まず第一日目の事です、雪上のキャンプが少し寒かったくらいです。第二日目は雷鳥沢から剣沢への移動から始まりましたが、立山乗越への登りで早速ビビりました。アイゼンなしの登山靴でツルツルすべるし、体力的にも中々きつい。しかも下にさえぎるものがないので、すべり落ちたらどうなってしまうのだろうかと考えて、ヘッパリ腰で何とか歩いたのですが、ハイマツの陰で休息する為に、急な斜面をトラバースした時は、どうしようもなく恐くて、恥ずかしいと思いながらも座り込みながらトラバースしました。

極めつけは両方きれている尾根上だったのですが、皆平気で歩いていたので少しへこみました。

別山下あたりでの斜面での雪上訓練が又恐ろしかった。ピッケルでの落下停止練習した小岩あたりまでは何とか我慢できたが、それより上の斜面では段々足がすくんで歩行が困難になってきました。佐々木さんが言ったようにそこからの剣沢の眺めは実に良かったのですが景色を眺める余裕もなく、早く下りたいと思うばかりでした。

一方、木野君の方はさらに高い大岩までアイゼンも付けずに随分余裕で登ってしまいました。明日の剣岳は、おれは登らず木野君は登るかもしれないと思いましたが、ヤッパリ木野君は見事に登頂しました。下りのアイゼン無しの歩行でも随分悪い思いをしましたが、テントに戻ってからの満足感はとてもいいものでした。

三日目は、小笹さん、大島さん、途中までの久保田さんのパーティーで奥大日岳に登る事になったのですが、昨日散々前剣岳の急斜面の登り下りを見てきたので99%ホットしました。残念な気はほとんどしませんでした。しょっぱないきなりアイゼンのネジがゆるんで他の人に迷惑をかけてしまいました。別山乗越あたりから小笹さんにザイルをつないでもらったお陰で精神的にかなり楽になって、アイゼンを付けて、しかもピッケルでの止まり方を覚えたお陰か乗越の斜面も割合平気で下れました。久保田さんと分かれたあたりからいよいよ見晴らしが良くなって、しかも雪底の上だということで恐なくなってきました。

2箇所急斜面を登り、いよいよ奥大日への最後の急斜面という所で、小笹さんがハイマツの右側に付いている雪底の道を避けてハイマツ地帯の左側をトラバースしようと言うので、大島さんがハーハー言いながらバケツを作る後をトラバースし始めました。休憩している時に実際スノーボードで下りている人が2人いたので恐くない恐くないと思いましたが、下を見るとヤッパリ駄目なので、山の斜面によりかかってへんな姿勢になって、足元ばかり見ていたので小笹さんに何度か注意された。足元から崩れ落ちる雪のかけらが一度も止まらずに下に落ちる様子や、空中を飛び回るイワツバメが余計に恐怖感をあおったが、何とか一度もすべらず尾根に出られた。奥大日一歩手前のピークでもう十分ということで昼食を食べて写真など撮ったのですが、どうも下りのトラバースが気になって景色どころではありませんでした。

結局下りはトラバースせず雪底の上を歩いたのですが、恥ずかしいことに正直ホットしました。それでやっと景色を楽しめるようになったのですが、見知らぬ登山者が小笹さんと僕のザイルのつなぎ方に聞こえよがしの非難をされました。僕は素人なので何ともいいようがありませんでした。大日岳へ向かう人達やら、斜面をすべりおるスキーヤーやボーダーやらで奥大日への道や、特に別山乗越の道は何百人もが昇り降りしているようでした。その後はアイゼン無しでしたが恐怖感は余り無く、少しなれたかなと思いました。

第四日目は、立山の大汝山、雄山、真砂岳、別山を八木さんや近山会の佐々木さんを交えて登ったのですが、やっぱり、昨日のトラバースを経験したにもかかわらず、かなり急なトラバースではヘッピー腰になって、みっともない姿をさらしてしまいました。天気は少し崩れてきていたものの富士山が見えるほどで、景色はとても良いのですが、高所で少し足場が悪いとこの三日間相変わらず恐怖心が押さえられなかった。というわけで、この合宿では、自分が臆病で、山の技術を手にいれるのには時間がかかりそうで、一人立ちすることができるか本当に心配になったのですが、とにかく、雪山の面白さが少し解って、これからも登りたいなという気になったようです。

小椋 剛 学部：理学部生物学科 出身高校：名古屋市立向陽高等学校

生年月日： 昭和57年5月30日生まれ

血液型：O型

山岳部に入った理由・抱負・やってみたい事など：

はるか遠くに見える山へたどり着いて、かつその中に入り込み何日かけてそれを越えてゆきたいな、などというあこがれがあったから山岳部へ入りました。

剣・立山合宿連峰合宿を終えて

新人 木野 英史



大学へ入学して約一ヶ月が過ぎた。振り返ればこの一ヶ月間は自分にとってものすごく内容が濃く、あっという間の一ヶ月間だったと思うと同時に、まだ一ヶ月しか経ってないのだなという思いもある。これは間違いなく山岳部に入部したためである。一ヶ月前の自分はまさか剣岳に登っているとは想像すらできていなかっただろうし、個性豊かなOBの皆さんに出会うことになると思わなかっただろう。

登山合宿に参加する前に、入部記念ということでいただいた、「立山からチベットへ」を読んでいた。今回の合宿はまさに最初の章、「残雪の立山・剣」という感じだった。しかし、正直言って文章ではあまり実感が湧かないというか、頭の中でイメージできなかった。百聞は一見にしかずと言うが、今回の体験は百見は一動にしかずと言うべきか、まさに体験して初めてわかることが多く、「ああ、本に書いてあったことはこういうことなんだな。」と思ってしまうことばかりだった。天候はまるで僕ら新入部員を歓迎するかのように快晴で、長年山に登ってきた山岳会の先輩諸氏ですら、「こんなにいい天気が続くのは初めてや。」というぐらいなのだから、よほど珍しいことだったのだろう。

がしかし、僕にとっては生まれて初めての登山がそんな天気だったわけで、「山＝快晴」というイメージが出来上がってしまい、もしかするとこれから山をなめてかかる一因になるかもしれないのが心配である。この登山合宿は何もかもが初めての連続で、期待と不安が半々という感じだったが、とにかく行動しなければ始まらないという思いだけで運動不足だった体を動かし、なんとか無事に終えることができた。

最後に、こんな貴重な体験をさせてくれた山岳会の皆さんに感謝すると同時に、今のうちにお詫びもしておきます。なぜなら、これからは現役部員が大活躍して、「OBの皆さ

＝ 43年目の墓参 ＝

2003/4/19-4/26

広谷光一郎

(参加メンバー) 橋本信行、橋本洋子、川勝弘一、大島富子、大島啓三、広谷光一郎
(シェルパ、ポーター) サーダー、コック、シェルパ、ポーター4、計8名

4月20日 我々はバンコク経由カトマンズに入った。空港では北濃氏およびヒマラヤ観光のスタッフに出迎えられ直ちにホテルヒマラヤへ。この日は学生のデモがあり、一般車両は外出禁止とあって、町中は日頃の混雑はなかった。

夕方、ホテルで東京農大隊（ローツェよりエベレストの縦走）の応援団が大勢きており、エベレスト、ベースキャンプまでのトレッキングとか、そこで思いがけず代表者の村井田博氏と会った。

43年前、森本さんが企画した山々は、ランタンリルン、タルンピーク、ツウインズ他であったが、市大がリルンを選んだことにより、翌年、東京農大隊は、ツウインズを決めたのであった。その時の副隊長が村井田氏であったのである。JACの仲間として長い付き合いではあったが、カトマンズで再会するとは奇遇といえるであろう。ここでランタンリルンが決定されるまでの経過を当時の森本さんの私信より抜粋してみよう。

「突然の話で恐縮だが、昨年末若干の資金の可能性を検討してきたが、4名位で350万-400万円で7000米峰なら行けそうに思える。大体、今考えているのはサイパル、トインズ、ガンガプルナといったところ、メンルンツェは小生の夢だが入山は難しいらしい。1960年1月15日森本生」

「カンチェの周辺のタルンピークは登れる見込みはあるが、カンチェが大きすぎて小さな前山の感ありで登高欲をそそられず（トインズも同じ）。又ヌプチェ氷河及びヌプチェ南面一帯は誰も入っていない。だが情報なく登れるかどうか全く解らない。ランタンリルンはリルン氷河のアイスフォールが登れるかどうか疑問。ガルワルは、東北部にチルスリとハーデイオールの7000米峰がある。これは登れそう。1960年3月18日森本生」

「チルスリ3山についてはかなり調べた。ポーランド隊の事はヒマラヤンジャーナルでも調べた。従って、ランタンリルンとチルスリの2つのプランを作っておいて、シェルパ問題（ダージリンシェルパ組合とカトマンズシェルパ組合との所属に関する抗争）の解決状況を見て4月中に決定したいと思う。1960年3月20日森本生」

「ランタンリルンに決めたいがアイスフォールの上及び左の小尾根のところがはっきりしない。同封した写真で寺畑氏サルパチョメ隊、深田氏、風見氏に意見聞いて欲しい。関西では今西氏はじめアイスフォールはゆけるが、その上及び左が問題という。中日新聞の笠井氏の意見では悪いがゆけると思う。泉さんはランタンリルンは一寸悪い、登頂できる見込みが90%あるところにしろと言う。今ごろそんなカモの7000米峰は残っていない。

チルスリは部落に人が少なく4-5月のシーズンではポーターの食糧まで担いで行くことになるので問題ということになってきた。従って、チルスリについてはヒマラヤンジャーナルとアルパインジャーナルの写真と諏訪田の資料（ポーランド山岳会年報が4月中に入手の予定）をみて、いずれかに決めたい。1960年3月30日森本生」

以上のような経過並びに関西登高会の1961年の候補（ガネッシュ2峰、ビッグホワ

イト、サイパル、チルスリのいずれか) が挙げられた左のランタンリルンに決定されたのであった。

4月21日 朝食後、シェルパのサーダー・アン・ツエリンと共に空港に向い、8時15分チャーターヘリコプターにて、一路ランタン谷の最奥のカルカ・キャンジンゴンパへ。ヘリは高度をぐんぐん上げ、まもなく左手にランタンⅡ(6, 571m)、そして稜線続きに雄大なスケールでランタンリルン(7, 245m)の西面が眼前に飛び込んできた。

アッという間の30分、8時45分にはキャンジンゴンパ(3, 840m)の広場に着陸した。思い起こせば、この30分間は7日間に相当するのである。1961年3月29日カトマンズをポーター含め総勢130余名が出発したのである。そして3月30日カカニ、31日バタルバザール、4月1日ベトラワーチ、2日ラムチェ、3日ドンチェ、4日シャブルベンシ、5日シャルパガオン6日ランタンというキャラバンであった。

快晴である、覚えのあるランタンリルン、反対側のナヤカンガ(5, 846m)、ガンジャラ峠、ホンゲンドプケ(5, 930m)、ガンチェンポ(6, 387m)が連なっている。

高度に慣れるべく10時まで休息、いよいよ4,100m付近に自らが造った慰霊碑に向った。10時出発、12時昼食、ビスタリ、ビスタリ登って行くも、この頃より、アラレ、次に雪が降り始め、気温も一気に3度Cまで下降、更に追い打ちをかけるように吹雪となった。

疲労の激しいメンバーは13時、3,915mの地点で引き返すこととなり、キャンジンゴンパに帰幕したのは14時30分であった。

他のメンバーはいくつものモレーンを越え、14時30分頃、リルンベースキャンプが望める4,000m付近の場所まで到着したが、吹雪激しく視界悪く、慰霊碑を見つけることはできなかった。

小高いモレーンに小さなケルンを積み、岩陰に線香をたき、ローソクをともし、森本隊長の好きだったタバコ、大島隊員には餅、キャンツエンにはハイキラーの材料(にんにく、とうがらし、塩)をお供えし、冥福を祈ったのである。そして全員が帰幕したのは16時30分であった。

その夜は、シェルパが用意したテントで快適な夜を過ごしたが、女性2名は高度の障害が現れ、状況があまり良くないので、酸素を夫々に数時間づつ吸入させ、快方に向った。夜半、天候は回復し、真っ暗で、ただ星だけが輝く夜空にランタンリルンがクッキリと陰影を落としており、43年前の5月10日の夜を思い起こさせた。

4月22日 8時、キャンジンゴンパを出発、今朝はガスで頂上は見えないが、キムシュン(6, 745m)までの釣尾根はハッキリと見ることができ、この景色を眺めながらリルンに別れをつけ、ランタンカルカ(3, 310m)へ、ゆっくりと下だり、約4時間後、カルカに到着した。

ランタン谷郡長(ラマ僧)の弟という人物の家裏の広場に幕営することになったが、この人物、57才、自分は13才であったがギャンツエン・ノルブが亡くなった事件は、よく覚えていると笑顔で握手を求めた。そして自分の父親は事件があった時、地元のポータ

一として協力したとも語った。

午後からの遭難碑での追善弔いをお願いしたところ、快く引き受けてくれた。(郡長に何かあれば弟である彼が跡目をつぐ必要があるため、ラマ僧としての修業はしているとか) キャンプより約 15 分歩いて 14 時 15 分、リルン直下の岩壁基部のオーバーハング下に、第 2 次隊(鈴木隊長)が設置した銅版を埋め込んだ遭難碑を訪れた。

碑に川勝氏が詠えたえんじ色の大きな“大阪市立大学山岳会旗”をかけ、たばこや大島ファミリーを撮った写真、線香、ローソクを供え、全員で般若心経を吟詠し、更にラマ僧によるラマ経典のお経をあげてもらった。次いで全員で雪山賛歌を合唱し、セレモニーを終了した。ラマ僧にはメンバーが持参したローソクや線香、そして 4,000Rs を寄進し、郡長に届けること、折あればお祈りを捧げるよう、また遭難碑の銅版が浮いているため、セメントによる補修するなどを依頼した。

夕刻、発熱、頭痛など高度の影響が少しでたメンバーもあったが、明日は更に下るので、心配はなかった。

4 月 23 日 朝 8 時、ランタンカルカを出発、ビスタリ、ビスタリ下って行くと途中、ランタン国立公園のチェック・ポストがあり、ネパール軍隊が警備していた。あらかじめ申請してあった通行許可証を提示して、更に下り、11 時 30 分にはランタン谷最後の夜営地ゴラタベラ(3,010m)に到着した。高度が低くなったせいか、全員気分も良くなり、広谷が持参したソーメンを茹で、冷し、つけソーメンパーティーで食欲も増したようであった。

4 月 24 日 朝 7 時、山峡から轟音がしてヘリが飛来し、チェック・ポストの広場に着陸した。我々は準備はしていたものの、慌ててチェック・ポストまで登り、機上の人となった。小型のヘリであったため広谷、橋本夫妻、サーダー、ゴタラベラの少女(5才)が第 1 便として 8 時に出発した。雄大な山峡に沿って飛んでいくため、ランタン・リルンは見えず、思わず振り返って合掌した。

しばらく飛ぶと右側すぐ近く、朝靄の中にガネツシュ・ヒマール山群をくっきりと見ることができた。そして、幾つかの尾根を越え 20 分後にはカトマンズ空港に着いた。空港の片隅で待つこと 1 時間、第 2 便のヘリで川勝、大島(富)、大島(啓)およびコックが帰着した。

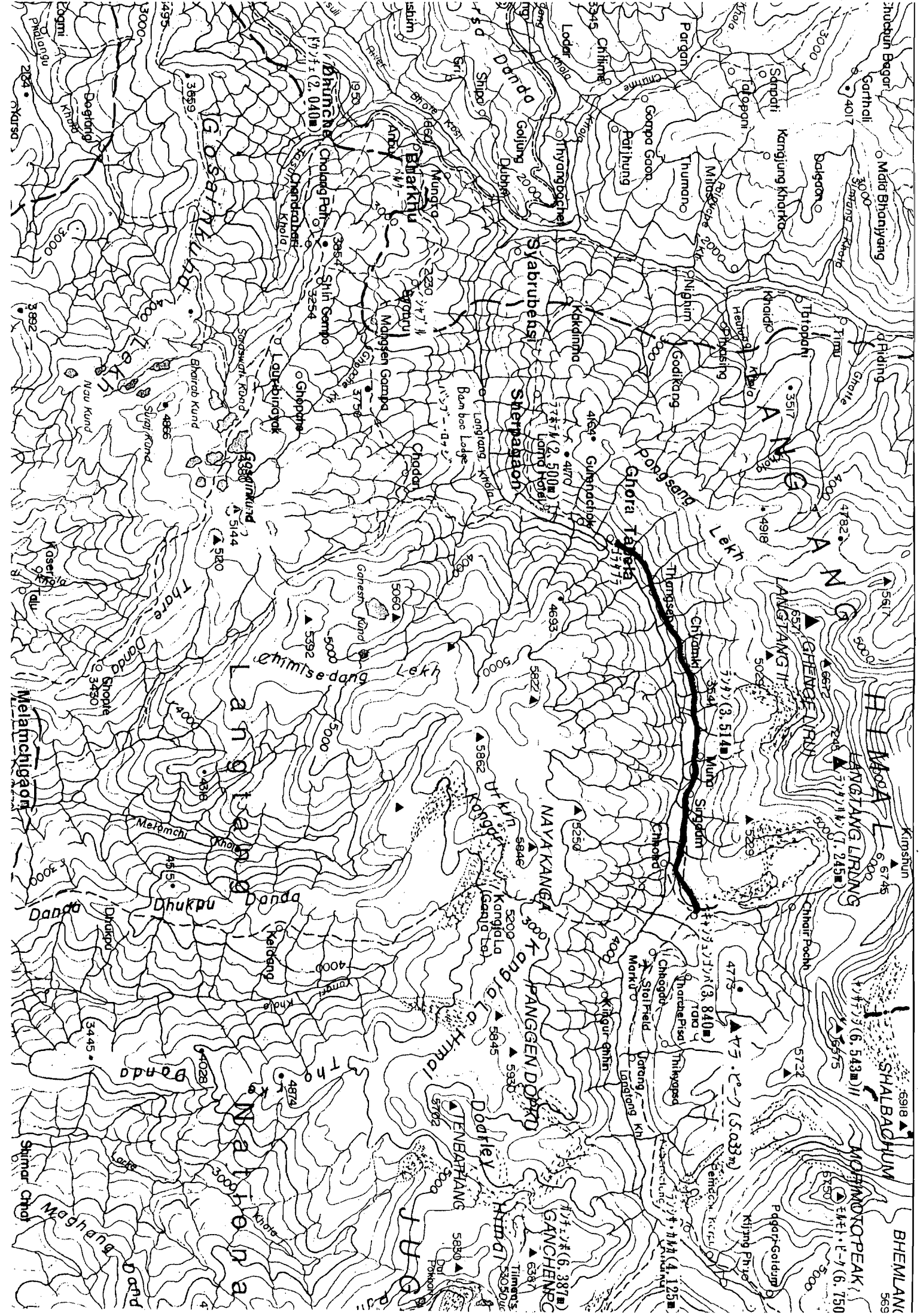
ホテルヒマラヤでは官原社長他スタッフに出迎えられ、社長のお声がかりで全員が“そばレストラン”でご馳走になり、親しく一時を過ごすことができた。

午後はカトマンズが初めてという大島(富)さんと一緒に北濃夫妻の案内で、世界遺産街を散策、また有名な紅茶葉販売店でお土産を仕入れたりした。

夕刻、エベレスト登頂者全てのサインのあるということで有名なレストランに案内され、北濃夫妻の好意による歓迎晩餐会が行われ、夜更けるまで久しぶりの旧交を暖め合った。

かくして 43 年目の墓参は終わった。私としては、1 つの区切りをつけたという感に満ちている昨今である。

以上



ランタン リルン憶懐

川勝 弘一

1961年という年は、自分にとっては体に刻み込まれた特別の「時」になっている。それまで度重なる遠征のための研究会に顔をだし、富士山の予備合宿では、頂上のお鉢にはったカマボコテントが強風で一夜にして破られたり、日常の仕事は、しているといても頭の中は、遠征のことでいっぱい、すべてをそれに集中して、日々をすごしていたことであつた。

しかし、いざ隊員選考の身体検査という段になって、折悪しく急性肝炎を患い、参加は断念せざるを得ない事態になった。この時点で今までの遠征、遠征という生活スタイルは自分のなかでガタガタと音をたてて崩れていった

仕事ことでもちょうど将来の方向付けをしなければならない時期とも重なり、このチャンスにがした以上は、もう2度と長い日数をかけて遠征に参加することなどは、諦めざるを得ないことになった。

神戸港の中央突堤で隊員の乗った船が、岸壁を離れるのを見送りながら、人の運命の軌跡を思い描いていた。しかし、運命に支配されているのは、わが身ばかりではないと思ひ知らされたのは、登頂の報せを心待ちにしていた所へ5月18日に飛びこんできた「大阪市大ヒマラヤ遠征隊の遭難」という一通の外電であつた。

それ以来ヒマラヤの他地域へはともかく、ランタンの谷へは、一度は入ってみたいと思ひつつ、時期の関係で第一回の墓参旅行には参加できず、残念な思いを持ち続けてきた。

この40数年間、時に思い出す精悍な森本先輩や童顔の大島先輩の顔は、当時のままであるにつけ、我が身は既に喜寿に達している。かつて読んだ物語に、ヨーロッパのアルプスへ、新婚旅行で登った若いカップルの夫がクレバスに落ちてなくなった。その時、遺骸はでぬまま年を経て何十年の後、氷河の末端から、夫の遺骸が発見されたと聞き、現地に赴いた妻の見たものは、新婚旅行当時のままの若々しい夫の姿であつた。そこで老いさらばえた自分の姿と比べて、なんという「時」の悪戯かと深く嘆いたという話を思い出す。

2003年4月21日 ときは移り交通手段も進歩して、われわれ高齢墓参団一行は、カトマンズを7時40分に離陸して、ランタンコーラの3800米の部落キャンジュンゴンパまで7人乗りのヘリコプターで僅か30分 8時10分に到着した。

1時間あまり休憩して、10時にリルン氷河の遡行開始。しかし、到着後間なしの行動であつたためか、高度の影響で体調の悪い人も出る。その上、道を左岸にとつたためキムシュン側により過ぎ、途中から右岸へ転進した為、約1時間ロスした。

登行を続けられる者3名で、せめてベースキャンプ地点までと登りだしたが、14時には引き返すという広谷隊長の指示と降雪が激しくなってきたので、氷河末端のモレーンの頂上(約4000米)あたりで、吹雪の中、ローソクを灯し線香を立て吹き消されないよう気使いながら合掌する。「君達よくここまできてくれたなあ」と森本、大島両先輩の顔を吹雪の中に垣間見たような気がした。

下山にかかると、長年担いできた荷を降ろしたようで、肩が軽くなり、リルン氷河からすぐ前に迫るランタンコーラ左岸のパンゲンドップやガンチェンボの6000米前後の鋭峰が、白雪を纏った山肌を夕日に紅色に染めている風景を飽かずながめながらヒマラヤの空気に、我が身をどっぷり浸していた。高度の影響か、少しぼんやりした頭を意識しながらブラリブラリとキャンジュンゴンパ目指して下っていった。

4月22日には8時に出発して、半日の行程でランタン部落へ下り、部落の北側に聳える大岸壁の下にある記念碑にお参りする。

大島さんの般若心経と地元の僧侶のお経そして全員の雪山賛歌の合唱で締めくくりとした。

4月23日にはゴラタベラ（3010米）までヘリのお迎えを得て、晴天に恵まれ予定通りの旅程を消化できたのはなによりの幸運であった。

この度の山行は広谷、橋本 両先輩には当初の企画から旅行中大変お世話になり、またカトマンズ在住の北濃さんには現地にてお世話になりました事厚くお礼もうしあげます。現役時代には大変お世話になった故大島先輩の姉上と弟様と山行を共に出来ました事を幸いに思っております。

ランタンへの旅の思い出

大島 富子

この度は、思いもかけぬヒマラヤ基参トレッキングを実現させて頂き、深い感動とかずかずの楽しい思い出を得させて下さいましたことを、広谷様はじめ市大山岳会の皆様に心から御礼もうしあげます。

さて、往きの準備は、装備及び筋力トレーニングは何とかできたものの、ガイドブックは何度読んでも実感が湧かず、勉強不足のまま出発した。帰国してから読んでみると、なるほどそうだったのかと理解できるのだが。

写真にしても、皆さんについて歩くだけが精一杯で、メモをする余裕など全くなかったので、一体どこで撮ったのかさっぱり解らない。テントの様子もロッジも3日間のが皆同じようで区別がつかない。どこで何を食べたのかも。広谷さんご持参のおそうめんだけは写真もあって分かるのだが。

ヘリコプターに乗ったには初めて。茶色いカトマンズの街の郊外は、緑の段々畑がてっぺんまで続いていて、その筋がバウムクーヘンのようだ。それも越え、山峽を縫いながらぐんぐん上昇してゆくと、へばりつく窓枠に真っ白に輝く巨大な雪の彫刻がガーンガーンと迫ってくる。その美しさと威容に息を飲んでいいる間に、シャッターチャンスを逃してしまう。とうとう来たんだ。ヒマラヤに！

キャンジュンゴンパ3840m。富士山より上とだけは認識できた。心弾ませながらランタンリルンへと一歩を踏み出す。

左側に絶えず聞こえる川音は、健ちゃんが「よう来た。よう来た。」と言ってくれているようだった。登ってゆく足許の岩陰には、小さな小さな青い美しい花の群が「見てね、見てね」と現れる。見つける度に、カワイイ、カワイイ！を連発した。薄いんだろうけれど、さわやかな空気、日差しもそんなにきつくはない。青い空に真っ白な雪山が見えてくると、もう最高の感激。世界最高級の山の姿を「右がキムシュン、左がランタンリルン」と教えられる。ぜいたくに幾度も小休止をとってもらって、また歩幅も丁度自分に合うペースだったし、経験者の啓三が「意識して空気を十分吸うように」と教えてくれていたので、ググググッと大きく吸い込み二歩三歩と歩くようにして、午前中は無理もなく歩けた。ところが昼食後少し歩き出すと、俄かに暗くなり、丁度岩場にさしかかったところで雪が降り出した。シェルパがおんぶして岩場を渡すと言って聞かない。吹雪は強くなるばかり。その時弟が「姉ちゃんもう引き返した方がいいよ」と言った。即「私もそう思う」と答え

た。迷いも未練もなかった。

悪天候は、下山でも体力を消耗させる。冷えに冷えて、ロッジに辿り着いた時は、疲労困憊。急に気分が悪くなった。ロッジには広谷さんが一人おられて、ポリ袋を手にしていらっしゃるのが目にとびこんだ。サットポリ袋が差し出された。受け取るや否や戸口に走った。全く危機一髪だった。あとは、テントで休んでいると、アンツエリンさんが酸素ボンベを持って来て、吸入の操作をして下さった。30分後にくるからとおっしゃった。ウトウトしたくなるほど気分がよくなった。本当にO₂の威力は絶大なるかなである。広谷さんの御指示だろうが、お二人の心づかいに感謝感謝。ヤッパリ高山病にかかったのだらうなあ。

夜中、テントを出てあっと驚いた。振り仰いだ空に、デーンと大きな柄杓が、今にも私の体を天に掬いあげそうだった。私はぐると漆黒の山に取り囲まれ、まるで深いかめの底にいるみたい。かめの左上縁に青白く雪山が冴えていた。リルンだったろうか。私が掬われそうになった北斗七星の周りには、ダイヤモンドが降り落ちるばかりに、ひしめき踊っていた。この夜の幻想的なシャンデリアを私は忘れることができない。それは幻想ではなくて、本当だったのだ。永久に私の宝物になるだろう。

朝食の間に、テントは跡形もなくきれいに片付けられていた。ランタン村へ下るトレッキングは、日本の五月の里山を歩いているようにのどかであった。放牧の黒いヤクがちじれたひげを垂らして、もくもくと芝生のように短い草を食んでいる。部落が近づくと、運動会の万国旗のように、カラフルなタルチョンが空高くはためいている。白い織りのようなものも立っている。道ばたに石組みがあり、お経らしきものが刻みこまれている。これは左を通らなければいけないそうだ。ランタン村に着いた。村は小さな盆地であった。お墓に行く。ほんの少し山肌を上ったところに、全村を見下ろして銅版の碑はあった。三人の名前が指でなぞりたくなるように彫りこまれていた。エンジに白抜き文字も鮮やかな大阪市立大学山岳会旗が碑にかけられた。旗はとても美しく盆地を見下ろして映えた。ローソク、線香、お供え物が置かれた。ラマ僧の方がお経をあげてくださった。男性方は般若心経をととなえられた。私じゅずをまさぐり手を合わせた。

市大山岳会の先輩後輩の固い絆が、お墓を礎き、お守りを土地の方に頼み、あとあとまでお心を配って居て下さることが、本当に有難く、心が熱くなるのを覚えました。親しみ易いランタン村を一望のもとにおさめるこのような素晴らしい場所に、後輩が果たして下さった初登頂を誇りに、三名肩組み合って、朗らかに村人と共に存在して下さるのでしょう。

市大ではない方で、お墓にお寄り下さった林様とおっしゃる方の手記をコピーで読ませて頂きました。今では時折の登山隊が寄り道して御まいりして下さることもあとと知り、心から嬉しく有難く思っております。

村ではコケコッコーの声で目が覚めました。ランタン村からゴラタバラの道では石楠花の木に幾度も出逢いました。紅い花の木、白い花の木、ピンクの花の木と石楠花は木によって咲く色が異なるのですね。背も高く、美しい花をびっしりと咲かせていました。健司が、その美しさをとても気に入った事を思い出します。上のお墓以外は、ずっと好天に恵まれ本当に幸せでした。参加者の精進が良かったのか、市大山岳会のかげの御声援の賜物でしょうか。本当に御尽力ありがとうございました。

ランタン リルン巡礼の旅

橋本 信行

かねて念願していたランタンの墓参りに行くことが出来ました。詳しい様子は広谷さんのレポートを読んでいただくとして私が気付いた事を、書かさせていただきます。

めざすお墓は遠かった。

出発前に広谷さんからBCの近くにあるお墓の場所を聞いておいてくださいと言われ皆さんからいろいろ情報をいただきましたが今回はBCまでも行けず残念でした。理由はまずキャジュンゴンパからBCまでの道をまちがえたこと。出発してサーダーのアンチェリンはグループの末尾で先頭はシェルパ見習いのテンバでした。彼がどんどん先を歩き谷の右岸の斜面を登ってゆき、そのまま付いていったらキムシュン氷河に行ってしまうところでした。途中川勝さんが気が付いて谷の右岸から谷底におり川を渡渉してまた左岸を上りましたが、この間違いで少なくとも1時間をロスしたこと。

2番目の理由はやっとBC近くの台地にたどり着きましたがそのころから猛吹雪で見通しが利かず時間切れとなったこと

3番目はグループの平均年齢が70歳と高くスタミナがなかったこと。

酸素

皆さんからヘリで急に上がったら高度の影響があるので酸素を必ず持って行けといわれたので用意してもらったのですが今回同行した女性2名には有効でした。キャジュンゴンパ（3,900m）に泊まった晩家内は疲労していましたが高度の影響と思われるシャックリが止まらず酸素のご厄介になりました。費用は一気圧あたり1米ドルで20気圧吸いました。（約 2,400円、使用時間は1時間強ぐらい）

帰ってから新聞で東京には酸素バーと言うものがあり酸欠の人が吸に行くとのことで費用は1時間当たり3,000円ぐらいとの記事をよみました。ヒマラヤの山奥では麓から何日もかかって人間が運んでくるのですから、東京に比べたら費用は安いものだと思います。

ネパール史

カトマンズで北濃さんから国王一家の皆殺し事件の噂を聞いたり、ホテル備え付けの雑誌で宮原さんのネパール近代史を読んだりして感じたことは、まだこの国では、国民の意識は中世の時代にあるのではないかと言うことです。日本でもヨーロッパでもこの古いスタイルの宮廷革命は中世には見られましたが、フランス革命や明治維新で近代マス文明社会に変化していく洗礼を受け現代社会を維持して行けるだけの意識改革が大衆に植え付けられたわけです。

しかしこの国では町には車があふれ、人々は町では近代生活をエンジョイしていますがこれから子供が麻疹にかかるように意識革命の洗礼を受けなければ普通の国になれないのかと思うと大変だなと思いました。

この一つの現れガマオイスト騒動だと思います。

お蕎麦をご馳走になったから持ち上げるわけではありませんが、宮原さんのこのあたりの考察には感心させられました。お忙しいのによく勉強されておられます。

発熱

キャジュンゴンパから翌朝ランタンの村まで下りましたが、その晩家内が疲労と高度の影響で発熱しました。

世の中、サーズ（新型コロナウイルス）騒ぎで今回の旅では発熱は特別の意味を持つことになりました。たとえサーズでなくても飛行場で見つければ禁足の恐れがあり、心配しました。幸い朝には熱も少し下がり何とかもう一つ下の部落である

ゴラタベラまで歩けたのでホットしました。また、もしこの計画がもう少し遅くサーズ騒ぎが大きくなっていれば出発できなかったと思いました。

それもこれも森本さんや健司がこの旅を心配してくれたお陰かと感謝しております。

エピローグ

広谷さんのお尻について、この何年間はパキスタンのガンダーラ、新疆ウイグルの佛教遺跡、ブータンの現在に生きている佛教者の生活を視る旅を続けてきましたが、そのいずれの旅でも人間がいかに仏と向かい合い生活してきたかをその厳しい環境とともに垣間見ることができました。

今回、それらの旅の締めくくりとして夫婦でランタンリルンのお墓参りができたことは本当に良かったと思います。お世話になった方々、ご迷惑をおかけした同行者の方々に有難うございました。

以上

最高齢エベレスト登頂 三浦さん

好天待ち4泊 粘りのアタック

世界最高峰エベレスト（中国名チョモランマ、8848メートル）に冒険スキーの三浦雄一郎さん（70）が22日、最高齢登頂を果たした。数少ないチャンスで、粘りとすさまじい登攀意欲で生かした。

今年、英国隊がエベレストに初登頂して50周年ということもあって、初登頂ルート（ネパール側）に多くの登山隊が押し寄せた。しかし、登頂時期に入ると強風が続く悪天。この日も、今季初めての登頂日和だった。

現地からの情報によると、三浦隊は、この日、8400メートルの第5キャンプを午前3時（日本時間午前6時15分）に出発。午前6時には南峰（8750メートル）を通過したが、前夜、8000メートル付近を出発した他の登山隊に

先行された。初登頂者の名前がつけられている難所のヒラリー・ステップでは、順番待ちで1時間半も待たされた。結局、予定より2時間遅れの午後0時10分の登頂になってしまった。

エベレストの今季は、強風に悩まされた。ネパール側に押し寄せた登山隊は22日、約200人だが、途中、数隊が断念。この日も8000メートル付近まで登った75人のうち、30人以上が登頂をあきらめて下山した。

三浦隊は常に、このルート（先頭を切ってアタック）の態勢に入っていたが、好天を待って第4キャンプ（7984メートル）で2泊、続いて第5キャンプで2泊。空気の希薄な8000メートルの高所で、これほどの長期滞在は例がない後の頂上アタックだった。

◆東奥大が連続登頂 読売新聞社に入った連絡によると、東京農大環境登山隊（山下康成総隊長）は22日、谷川太郎登攀（とうはん）隊長（35）ら5人が世界最高峰エベレスト（中国名チョモランマ、8848メートル）に登頂した。登山隊は10日にネパールヒマラヤのロツェ（8516メートル）の登頂に成功しており、今回のエベレストと合わせて連続登頂を成し遂げた。これで谷川登攀隊長は、世界第5位までの高峰を征服、日本初の「世界ビッグ5」登頂者となった。

2002 秋 みちのく二人旅 (10/5~15)

S45 卒 大島一恭 記

10月5日(土) 晴れ

車；吹田 IC(7:00)-172km-(8:50)敦賀フェリー乗り場(新日本海フェリー 11:15 発翌日 6:00 秋田港着)

佐々木氏と千里中央待ち合わせ、大島の X-trail にて2週間の東北山と温泉と紅葉の旅に出発。

10月6日(日) 曇り時々ガス

「秋田駒ヶ岳」1637m

車；秋田港(6:00)-角館・田沢湖-102km-(7:40)登山口駐車場-シャトルバス-8 合目(1300m)

歩；8 合目(8:40)~(9:40)男岳(10:10)横岳(10:40)男女岳~(11:40)8 合目-シャトルバス

東北の山旅一日目は、標高差 300m の秋田駒ヶ岳周遊で足慣らし。土日祝はマイカー規制にて、スキー場の P に車を置きシャトルバスにて 8 合目まで 20 分。約 1 時間山腹を巻く様に登り頂きへ。山頂はガスの為、眺望は皆無。早々に下山。秋田駒ヶ岳と言う山頂は無く、幾つかの峰の集合にて、主峰は男女岳。

車；P(12:50)-乳頭温泉郷「鶴の湯」(14:00)-84km-(16:00)相沢キャンプ場・相沢温泉「お山の湯」

鶴の湯は坂上田村麿以来 1 千年を誇る銘湯、白湯(強酸)黒湯(アルカリ)露天色々あり、歴史を感じさせる湯治湯、400 円。但し TV 放映来お客が多い。**お山の湯**は故郷 1 億円で掘った温泉だが、茶色の湯を薬で脱色透明にしている、500 円。同湯した地元の方は網張温泉を地域 1 番に上げた。岩手山の南麓の相沢キャンプ場は広い牧場の横に有り、沢山の牛に見つめられて、炊事棟の中にテントを張る。今回の旅のテントは鬼頭以外は全て無料、管理人無しの広々貸切であった。尚、今回の食料計画は夕食に炊込御飯(鶏・山菜・他)を炊き、半分を翌日の昼食用にタッパに詰め、朝はラーメン。トトのサージ系と野菜は玉葱とキャベツの佐々木式サタ。

10月7日(月) 雨 沈殿

豪雨の為、沈殿。10km 北の**網張温泉**「国民休暇村岩手」にて 10 時半から 14 時半まで過ごす、500 円。白濁硫黄で効きそう。露天もあるが雨にて行かず。1 週間 21 食付き 35,000 円湯治セットも有るよ。

10月8日(火) 曇りガス時々雨、強風

「岩手山」2039m *

車；T S(5:40)-11km-(5:52)馬返登山口(600m)

歩；馬返 P(6:00)~(8:40)8 合目避難小屋~(10:00)頂上~(10:30)避難小屋(11:30)~(13:30)馬返 P

朝の天気予報が芳しくないで、当初予定の御神坂コースを柳沢コースに変更する。馬返 P には先着車が 5 台、綺麗に整備された登山口より標高差 1400m を登り出す。7 合目までグイグイ高度を稼ぐ、途中大きな爆発音に肝を冷やす。なんと真下が自衛隊の演習地であった。何発打つかと数えたが切りがないのでやめた。一発で何万円消えるのだろうか？灌木帯から抜け出た途端強風、8 合目避難小屋(1800m)で完全武装する。此处には地元の山岳会がボランティアで詰めている。お鉢の端まで登ると凄強い強風、頂上目指しお鉢の稜線を歩き出す、途中より更に風が強くなり佐々木氏が 2m 程飛ばされる。体重の差がこんな所が出る。これはアかと戻り岩陰に避難し待機。いくら待っても風は弱くならず、ここまで来たからにはと強行突破を図る。途中 2 箇所這う様にして何とか頂上に着く。早々に引き返し避難小屋のストーブで暖まり、雨をやり過ごす。此处にはコヒまである。続々と後発組がやって来た。

車；馬返 P(13:40)-お山の湯(14:40)-滝沢・紫波 IC-100km-(16:10)河原の坊キャンプ場

(1000m)

麓に温泉の無い早池峰の為、お山の湯に入る（途中岩手山温泉の看板が出ていたが潰れていた）

10月9日（水） 雨後ガス強風後晴れ時々曇り **「早池峰山」 1917m ***

歩：T S(6:10)～(6:35)小田越～(8:50)頂上(9:30)～コハノ沢(11:30)T S

昨夕からの雨は止まず、雨具を着ての出発となるが歩き出すと小降りとなる。森林限界を過ぎてからの石が非常に滑り易く苦勞する。下山に使いたくないコース。頂上に着く頃には晴れ間も見えるが、遠景は見えない。頂上に立派な避難小屋。下山は直下降でグイグイ降りる。花の山として有名だが、この季節花は無くダケカンパの黄葉のみであった。ああハチマシキツが見たかった。

車：河原の坊(11:50)-紫波(13:20)-紫波・一関 ic-165km-(15:30)須川キャンプ場（須川高原温泉前）

紫波のR4交差点のはらぺこ屋十割蕎麦は質量ともお勧め。須川温泉大露天風呂は白濁硫黄臭、源泉目の前の大迫力で効きそう、500円。ドライブコースの紅葉黄葉は見事。此处は？の純林。

10月10日（木） ガス・雨後曇り晴れ **「栗駒山」 1627m**

歩：T S(6:00)～須川コース(7:40)頂上～産沼コース(9:35)T S

小雨なので、硫黄の匂いの中を登る。頂上稜線は風雨となりガスも濃く3日連荘の何も見えないピークにてガッカリ。下に着く頃には雨も上がり、ビジターセンターの見学を終わる頃には晴れ間も見える。

車：T S(10:50)-鎌内林道・地熱発電所・吹上高原・鬼頭温泉間歇泉弁天-80km-(15:00)荒雄湖畔キャンプ場

？の純林を快適ドライブ、林道にて時間はかかる。途中地熱発電所・地獄沢も見学。間歇泉の入園に400円取られたので其処の鬼頭温泉大露天風呂に入る。少々ヌルイが我々2人きり。鬼頭のキャンプ場は2ヶ所有り、吹上高原は@700円、荒雄は@500円。唯一有料のキャンプ場であった。食後、茸屋推奨の「めの湯」に行くがそれ程でもない（500円）。地元民は300円。

10月11日（金） 晴れ 休養移動日

車：T S(8:00)-鳴子ダム-秋ノ宮温泉郷-河原毛地獄-秘湯泥湯温泉-鳥海山麓中島台林道-ブルーイン-184km-

-(14:50)霊峰公園キャンプ場-湯の台温泉鶴泉荘往復

朝濃霧であったが車に荷物を積み込む頃には快晴。本日は山登り無し。林道をドライブすると東北の山林は

ブナとミズナガが中心で有る事を実感する。佐々木氏は今回のブナは雨飾と同じく白神より立派だとブナを見る度

に仰る。泥湯温泉は日本秘湯を守る会会員、白濁硫黄500円。温泉卵は黒い。中島台林道はジャリ道と聞いていたが立派に舗装されていた。湯の台温泉500円は期待外れ。鳥海の頂きがやけに白いのは花崗岩かな？夜初めての満天の星空に天の川も見え明日の天気が期待される。

10月12日（土） 快晴 **「鳥海山」 2236m ***

車：T S(5:05)-9km(5:22)鉢立P(1000m)

歩：鉢立(5:30)～(7:00)御浜～(10:10)新山頂上～(10:30)七高山(11:35)～(14:30)鉢立

久し振りの快晴、ピンク色に輝く日本海を背に歩き出す。良く整備された広い道だが、ダラダラ登りで高度は稼げない。千蛇谷と尾根のコース分岐点に着き上部に雪が付いて

誰に教えられてこんなしけたキャンプ場に來たのか？（是までで最低のキャンプ場であった。）

南下するにつれ、キャンプ場の設備その他色々窮屈に悪くなって来る感じ。

10月15日（火） ガス・曇り

「安達太良山」1700m *

車：T S(5:15)-(5:30)奥岳登山口P(1000m)

歩：登山口(5:45)～(7:00)薬師岳～(8:00)乳頭頂上～(8:55)薬師岳～(9:40)登山口

昨日より、携帯メールで小笹氏より「出来る限り早く那須へ来い」と攻め立てられ、くろがね温泉コースは諦め最短の往復コースを取る。ゴンドラ（薬師岳の横に着く）は未だ出ておらず、帰って来る頃ゴンドラ組がドンドン登って来た。薬師までは視界も効き紅葉が美しいが、その上はガスと強風。降りてビックリ、広い駐車場が満杯、休日でもないのに関東の人は遊んでばかり？（日光・那須でもその感を強くする）

車：P(10:25)-(10:35)岳温泉(12:00)-二本松 ic・西那須野塩原 ic-134km-(14:30)長谷川邸

昨日下見をしておいた公衆浴場（宿泊の部屋もあり湯治用）の**岳のゆ** 300 円にて汗を流す。時間調整の積りで途中のS Aでテント乾し等していたら那須に着くのが 30 分遅れてしまった。長谷川・小笹・苑樹氏と合流、長谷川宅に山本氏も来られ那須後発組のイベント開始。長谷川氏のベストアレンジの温泉・築の鮎と続き、10 日間の粗食とシュラの二人旅は此処に終わった。築の鮎と久方振りのフンは最高、感謝、感謝！！

終り

追記

この後、16 日に**那須三斗小屋温泉**大黒屋泊（峰の茶屋では岩手山並の強風にあおられて、小屋へ直行）、

17 日は打って変って無風快晴、秋晴れの下「**那須岳**」1915m *登頂と続き、18 日朝長谷川邸を辞し、

小笹・苑樹・佐々木・大島の 4 人にて日光と八ヶ岳麦草峠の紅葉を楽しみ深夜帰阪した。

総括

登った山：9（内 100 名山 6 = * 印）

入った温泉：14（内推奨；乳頭・網張・須川・泥湯・鎌先…やはり歴史は凄い＝千年の銘湯）

走った距離：2300 km

使ったお金：50,000 円／一人

を遊抄

気温がマイ
ナス二〇度
もなる冬の登
山は一つ間違
えば死に至
る。皆が集中して取り組
まないとい目的は達成でき
ない。

山を通してチームワ
クの大切さや、人
生における倫理観
を教わった貴重な
場、それが大阪市
立大学山岳部だっ
た。

体調不良の仲間
を置いて独り登頂
に成功したアタッ
ク隊に対して、「道
理に外れたことを
するな」と激しく叱責さ
れた現タイヤモンド電機
会長の池永薫爾氏は、お
世話になった先輩の一人
だ。当時は父親よりも怖
い存在だったが、厳格さ
り強い。（おかの・ゆき
よし）タイキン工業副社
長

山岳部の仲間

岡 野 幸 義
今でも登山やスキ
ーを楽しむ。五年
前には有志でヨー
ロッパアルプスに
挑戦した。「次は
山の仲間とは、

氏会社の製品は自動
車業界で高く評価されて
いる。工場にうかがうと
社員の皆さんが心からお
客さんを歓迎する雰囲気
が感じられた。山と同様、
技術と品質に対する厳し
さに加え、深い気
配り、包容力とい
った「人柄」で工
場ができているん
だなと思う。

キリマンジャロ登頂

2003/2/28-3/2

36年卒 長谷川ふみ子

キリマンジャロのウフルピーク (Uhuru Peak 5895m) に登ってきました。在ケニア・タンザニア大使が毎年ケニアに住んでいる外交官を対象に企画している登山で、今年は日本人9名を最高にアメリカ人、カナダ人、フランス人、イスラエル人、タンザニア人の計31名の参加でした。

2/28

ナイロビ (標高1700m) をあさ8時半出発。ケニア・タンザニア国境での出入国手続きに時間が掛かり、麓のモシ (1100m) 近くの Marangu Hotel に4時過ぎ到着。

ホテルのオーナーからルートのレクチャーがあり、持ち物点検。大きな倉庫に登山用具がびっしり備えられていて、足りない物があれば何でも無料で貸してくれ、不必要な物は置いていく仕組みになっていて、これは素晴らしいと思った。気に入らないのは、こんな大きいグループで、しかも毎年やっているのに、オーガナイズが下手(これがこちらのやり方なのだが)で、何時にどこに集まって何をするかが全員に連絡され実行されるまでに1時間近くかかること。何を言っても返ってくる返事は「ポレポレ (ゆっくり、ゆっくり)」で、初めはイライラの連続だった。

3/1

朝食後、各自ポーターに紹介される。全行程同じポーターが1対1で付くが荷物は先に行くので、夕方までに必要な物は自分のリュックで運ぶ。

Park Entrance (登山口1700m) まで車で。記帳後、皆バラバラに歩き始める。トップからビリまで1キロ近く離れているのではないかという感じ。

Mandara Hut (2743m) まで、12キロの行程を1時間の昼休みを入れて5時間。それでも「早すぎる」と叱られる。

毎日ゆっくり歩く事が高度適応と筋肉に疲れを残さないために必要との事。色々な鳥やサルに出会う楽しいルート。小屋に到着後、夕暮れと早朝のクレーターを散歩。

3/2

Horombo Hut (3760m) までの長いだらだら登り。15キロを8時間で歩く。木苺や蕨を見つけたり、滝が幾つかあって楽しかったが、とにかく長い！

3/3

Kibo Hut (4730m) まで upper route を登る。16キロを8時間で。Kibo Peak と Mawenzi Peak の鞍部に行く道で、Mt. Mawenzi がとても綺麗。

頂上は直ぐに雲に隠れてしまうが、ポレポレでどう歩こうと誰も注意しないから 30分近くも雲が消えるのをのんびり待つ事が可能で、ポレポレの良さを発見した。OCUACでもやってみたら？

途中で水の最終点があり、その先は high altitude desert となる。標高4000mを越す

と、気分の悪い人が出る。 同じ時期に Kibo Hut のあたりで積雪が見られる事も多々あるらしいが、今回は全くカラカラに乾燥。

翌日のアタックに備えて、夕食 5 時半、仮眠 5 時間半の予定が、ボレボレで仮眠 2 時間半になる。 殆ど一睡も出来なかった。

3/4

熱い紅茶とビスケット 2~3 枚で朝食。 真夜中 12 時に出発予定が、半時間遅れ。 星が覆い被さってくるように大きい！下はスパッツに山ズボン、更に冬ズボンの上に雨具のズボン。上はセーター 2 枚にフリースのジャンパー、スキー用アノラック、雨具。言われたとおりに着ると普通に歩くのも辛いくらいコロコロになる。

防寒水筒も凍るからセーターとアノラックの間に持つようにと注意。デジカメにホッカイロを貼り付けてジャンパーのポケットに。11 人のガイドが我々の間に等間隔に入り、きっちり一列。さすがに緊張感が走る。

富士山の砂すべりを登る感じ。 だんだん疲労と眠気で足が上がらない。ガイドの言葉はスワヒリ語だけ。頭の上を大声が飛び交うが、「休もう！」と言っているのか、「もっと登れ！」と云っているのか分からない。せめて大事な事だけは英語で言ってくれ！と言いたくなる。

砂すべりが岩場(と言っても大きい岩がごろごろ)に変わって、登る角度が更にきつくなり、頂上近い事を期待させるが、なかなか着かない。漸く空の色が変わり始め、御来光に間に合わないかと焦り始めた頃、頭の上から "congratulations !" の掛け声。 うれしかった！

Gillman's Point (5680m) である。 6 時間かかった。

紅茶とビスケットで乾杯！ここで一応 CERTIFICATE (登頂証明) がもらえるが、頂上のクレーターのへりを更に 2 時間歩くと Uhuru peak (5895m、本当の頂上) がある。今日はこの後高度差 2000m の下りが待っている。 体力が続くかどうか心配だ。朝日に煌めく雪渓、と言うよりは天に向かって突き上げたような氷の壁に魅せられて歩き始める。空気の薄さを感じる。 ろれつがまわらない。

私以上にバテたのがデジカメ。 電池がいかれて 1 枚も写っていない。念願の Uhuru Peak に到着。 大満足！暫くボーとしている。 これはいけない、高山病の始まりかも。大急ぎで Gillman's Point まで戻って、岩場の下りは OK。砂すべりで調子に乗っていたら靴の中でつま先がきつくあたる。 あまりの痛さに靴下を脱ぐと爪が 4 本ご臨終。 残る砂すべりを泣く泣く下りて、小屋(Kibo Hut 4730m) で 2 時間足らずの休憩。 16 時間ぶりの食べ物がスープとパンとチョコレート。 ちょっと情けない。今夜の泊り(Horombou Hut 3760m) まで更に 3~4 時間の下り。痛い足を引きずっての下り道は、夜中の登りよりずっと辛かった。

3/5

Horombou Hut (3760m) から Marangu Gate (1700m) まで 27 キロを下る。Gate から車でホテルまで。 5 日ぶりの風呂とビール。やはり下界はいいなあ。

夜はホテルの庭で、ポーター、ガイド、食事を作ってくれた人など、60 人あまりのスタッフと我々の約 100 人で盛大なパーティ。

可愛い「キリマンジャロの歌」を聴き、バナナのドブロク(我々にはとても飲めない代物だった)を振舞われて、最後の夜をエンジョイした。

隣の国タンザニアから一路ケニア・ナイロビを目指して車は猛スピード。3 時過ぎ無事帰宅。

登山口の係員からの情報で、記録を取り始めてからの最高峰ウフル・ピーク登頂者の最高齢は 74 歳。ついでに私の年以上のウルフ・ピーク・サーティフィケートの持ち主は 100 名に満たないとの事で、大いに誇りに思ってくださいと言われ、

年をとっていること(自分ではそう思っていないが)も悪くないかなと思った。そして 75 歳になったら、最高齢の塗り替えにチャレンジしようかなと。

デジカメは写らなかった人が多いようだが、誰か写った人から写真が手に入ったらお送りします。

以上

編集後記

<山岳部復活への道のり>

佐々木惣四郎

部員が居らなくては部室を明渡して欲しいと学生部より連絡されたのは昨年 12 月であった。急遽対策の為、名義借りからスタートしようと小林教授に依頼するも、とても無理との回答のまま期限の本年 3 月となった。

泉四郎さんの娘さんが在学中との情報で娘さんと急遽コンタクトして期限ギリギリの 3 月 27 日に部員名 3 名登録して届出してやっと存続を認められた。

その後、3 月 12 日、27 日、4 月 2 日の新入生の登校に合わせて小笹さん、久保田さんの作成のビラ配布と川勝さん手配の部旗を使用してリクルートを実施。

幸いにも 4 名が入部しました。一人はリクルートにて、一人は HP にて 2 名はクラブ紹介(佐々木作成)を見てきたとの結果です。

何とか 1 年をキープし次年度につなげたいと思っています。

<現況>

八木 信男

現在、部室は専門構内にあります。場所はプールの北側に面したクラブボックス棟にあります。前のバックネット下にあった部室は今はトレーニングルームとなっております。そこから歩いてすぐのところに現在の部室があります。

また、前のボックスのすぐ南側には有恒会により建立された桜の碑と、戦没学生の碑がありますのでお越しの際はこちらの方もごらんください。

お越しになられる際は、八木(09085720372)までご一報願えればご案内致します。部会は原則的に毎週月曜日の午後 5 時からです。差し入れなど大歓迎です。

現在、書籍が不足しております。これから山へ行こうという若者に是非すすめたいという本がありましたらご寄付ください。